

中世・草戸千軒探検 ⑱

すなど
～漁る～

草戸千軒Ⅰ展示室では、今からおよそ600年前の南北朝時代を中心とする時期の、草戸千軒の町並みを実物大で復元するとともに、実際の出土資料を生活の場面ごとに分類して展示し、人々の生

活の様子を詳しく紹介しています。

今回は、「^{たがや}耕す」のコーナーから農業に関する道具を紹介しました。今回は「漁る」、すなわち漁業に関する資料を紹介します。

草戸千軒の集落が存在した鎌倉時代から室町時代にかけては、集落のすぐ南にまで海岸線が迫り、集落の前面には瀬戸内海が広がっていました。集落の人々の生活が、この瀬戸内海の水産資源と深く結びついていたことが、さまざまな出土品から明らかになります。

水産資源との関係を示す資料として、まず漁具を紹介しましょう。

とくに多いのは、^{いわ}沈子と呼ばれる漁網に付ける^{おもり}錘です。大部分は粘土を焼いて作った^{どすい}土錘で、約二千点が出土しています。大きさや形態には多様性があり、漁をする場所や漁法によって使い分けられていたようです。また、^{あば}浮子と呼ばれる漁網用の木製の浮きも出土しています。

網漁ばかりでなく、もちろん釣り漁も行われていました。ただ、釣針は鉄製のものが多かったと思われ、さびて消滅しやすかったためか、出土品としては4点ほどしか確認できていません。そのほとんどは^{かぎ}鉤形に曲がった釣針ですが、なかには先端が4本に分かれた^{いかり}錨形の釣針も出土しています。こうした錨形の釣針は、現在でもタコを釣るのに使われていることから、出土品もタコ漁に使われたと考えられます。

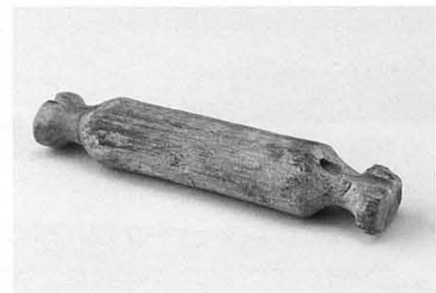
また、先端が^{ふたまた}二又に分かれた鉄製の^{やす}稽も出土しており、魚介類を直接刺す漁法も行われていたことがわかります。

さらに、遺跡で見つかったゴミ捨て穴からは、食物の残りかすとして大量の魚骨や貝殻が出土しています。これらの資料からは、集落で暮らした人々がどのような食材を利用していたかを具体的に知ることができます。ちなみに、魚骨の中で最も多いのはマダイで、体長が数十センチを超える大型のマダイも多く食べられていたようです。瀬戸内海の水産資源は、現在よりもはるかに豊かな恵みを、沿岸地域の人々にもたらしていたようです。

(主任学芸員 鈴木康之)



漁網用の土錘 (長さ4.6cm)



漁網用の浮き (長さ13.8cm)



かぎ形の釣針 (長さ7.2cm)



錨形の釣針 (高さ7.8cm)